

日本語文法学会 第15回大会（於：大阪大学） チュートリアル資料

日本語文法研究のための文献探索 —データベース検索から論文公開まで—

茂木 俊伸[†]

[†] 熊本大学文学部, E-mail: tmogi@kumamoto-u.ac.jp

0. 自己紹介にかえて

略歴：

1998～2003 大学院生（筑波大学） 現代日本語文法（とりたて）＋コーパス
2003～2004 非常勤研究員（国語研） ＋外来語，コーパス構築
2005～2013 大学教員（鳴門教育大学） ＋国語教員養成，徳島方言，etc.

私的活動：

2000.02～ ウェブ上の雑誌目次を集めた「総目次リンク」作成（～2005.04）
2001.02～ 日本語研究のためのリンク集「やちまた」公開 ^{WEB}
2005.04～ 同コンテンツとして「目録リンク」「検索リンク」作成

※^{WEB}マークのリソースは，p.18にURLを示してあります。

公的活動：

2002.03 「とりたて詞関係文献資料集」（沼田善子）アシスタント
2004.03 「全国国立大学電子図書館電子化資料一覧」（矢澤真人）アシスタント
2012.03 「「とりたて」関連研究文献目録」公開 ^{WEB}
※科研費「電子化された日本語研究論文情報の流通・活用に関する基礎的研究」
2013.11 「ウェブを活用した日本語研究文献情報の収集」（茂木 2013b）
2014.03 『語文と教育』（鳴門教育大学国語教育学会）リポジトリ公開実務担当
2014.09 「外来語の意味・用法に関する文献目録」公開 ^{WEB}

◆大学院生のときに文献探索のノウハウを習得。（←自分の研究，アシスタント）

→ 学術情報の電子化の流れが本格化。ノウハウの多様化・陳腐化の加速。

→ 自分の専門分野でどう情報を活用するか（情報の利用・発信・教育）

※ 図書館情報学だけに任せておくのではなく，日本語学の中で何ができるか。

■今日の目標：

- ・日本語文法研究分野の文献探しを効率的に行う方法について，ウェブ上で流通している学術情報（データベースなど）の現状と活用方法を中心に，（茂木 2013b に書けなかった個人の経験やデータを含めて）お話ししたい。
- ・また，時間が許す限り，「探す」と表裏の関係にある，論文をどうやって流通させるか（いかに読んでもらうか）の工夫についても，お話ししたい。

1. なぜ「まず先行研究を読みなさい」なのか —文献探索の目的論—

- そのままページをめくらずに，理由を考えてみましょう。

- ・ 先行研究を読まなければならない理由は？ → 学問とはそういうものだから。



《図 1》 Google Scholar 検索画面 ^{WEB}

- ・ 「巨人の肩の上に立つ (Stand on the shoulders of giants)」
… 学問の進歩は、先人たちの積み重ねの上にある (個人的な営みではない)。
- ・ もう少し具体的に言うと……

「先行研究を読む」行為は、研究のプロセスのさまざまな段階で要求される。

- 1) スタート段階： このテーマの先行研究はあるだろうか？ (ドキドキ)
どんなことが言われているのだろうか？
→ 当該分野・テーマ・トピックの知識を得るための文献探索 〈調べ読み〉
- 2) 考察段階： 自分は果たして何を明らかにした (い) のだろうか？
 - ・ この現象のどこが面白いの？
 - ・ この論文とどこが違うの？
 - ・ こういう分析はダメなの？
 - ・ で？ (So what?)→ 自分の研究を相対化するための文献探索 〈評価読み〉
→ 「点」(特定の論文) との対比から「線」(研究史) との相対化へ

◆個人的体験：

「とりたて」研究 → 歴史が浅い。分析の枠組みがさまざま。
まずは網羅的に文献を読んで知識を獲得し、それら全体を見渡したうえで、自分の研究を位置付ける必要があった。(博士課程ではむしろ〈評価読み〉の能力が重要)

- 「とにかく探せ／読め」では精神論。目的意識をはっきりさせる必要がある。

■今、要求される文献探索（あなたの指導教員の学生時代と比べて……）

- ・ デジタルメディアをうまく使いこなさなければならない。 ※「過情報」だけどね。
- ・ 古い文献は紙媒体を使って探さなければならない。
- ・ 論文の発表場所が増えた結果、さまざまな媒体に目配りしなければならない。
- ・ 研究の蓄積が進んだ分、量を読みこなさなければならない。 ※「古典」もね。
- ・ 記述研究の人も理論研究の論文を読めないとね。 ※逆もあり。

→ 「超人か！」 と言いたくもなりますが……

- ・ デジタルメディアをうまく使いこなせれば、文献収集のコストが下がる。
- ・ 発表媒体ごとの目配りの方法が分かれば、あせる必要はない。
- ・ ある程度の量を読みこなさないと、そもそも研究史が理解できない。

→ 「文献を集める・読む」ことは、研究の「目的」ではなくプロセスの一部。

→ 力を入れるところと効率的に処理するところをうまく分けるのが吉。

2. 「文献」の「探索」とは

学術情報の入手先：

[1] 研究文献 … 図書、雑誌論文など（一般に「先行研究」と呼ばれるもの）

[2] 事実に関する資料 … 新聞記事、統計、用語集など

→ 今回は[1]のみを扱う。

2.1 研究文献の刊行形態

● 「本」を探るか「記事」を探るか。

A. 図書（本） a-1. 一般書： 特定のテーマについて、一般の人向けに書かれたもの。

a-2. 専門書： 特定のテーマについて、専門的な内容が書かれたもの。

a-2'. 論文集： 専門的な論文を集めて一冊の本にしたもの。

B. 雑誌 b-1. 商業誌： 一般の書店で流通する雑誌（月刊、季刊など）。

b-2. 学術雑誌： 論文や書評などが掲載された定期刊行物。「学会誌」（全国規模、地方規模、各大学内の学会・研究会が発行）、「紀要」（大学の学部や研究室、センターなどが発行）など。

※ 一般向けになればなるほど読みやすいが、内容は相対的に薄い（厳密さを欠く）。

専門的になればなるほど読むのに力があるが、内容は相対的に濃い。

■研究文献の流通ルート（アクセスのしやすさ）



《図2》アクセシビリティによる研究文献の分類

◆ 15年前に比べて……

- 1) 新刊の図書や雑誌の数が増加（ただし、人文系の商業誌は休刊が相次ぐ）。データベースが充実し、ウェブ上で情報が入手しやすくなった。
- 2) 絶版や私家版の図書でも、ウェブ古書店で手に入りやすくなった。
- 3) 市販されていない媒体（*印）がウェブ上で無料公開されるようになり、脱・灰色の傾向が急速に進行中。

2.2 文献を探すプロセス

- ① 文献の探索： どんな文献があるか探す。
← 求める文献が決まっていない（どんな文献があるかが分からない）場合
- ② 所在の確認： 文献がどこで手に入るかを調べる。
← 欲しい文献は決まったが、どこにあるかが分からない場合
- ③ 入手方法の確認： 文献がどうやって手に入るかを調べる。
← どこにあるかは分かったが、近くで手に入らない場合

■ここでは①を中心にお話する。②と③にも適宜触れる。

※ 次のような、直接的な「答え」が欲しいケースは除外。適切なリソースを参照。

- ・「用語の定義を知りたい」 → 事典類（『日本語文法事典』（2014, 大修館書店）, 『日本語学研究事典』（2007, 明治書院）, 『日本語大事典』（2014, 朝倉書店）, 『言語学大辞典（第6巻・術語編）』（1996, 三省堂）, 『新版日本語教育事典』（2005, 大修館書店）など）
- ・「著者名の読み方は？」 → Google で検索（研究者データベース等にヒット）

3. 文献探索の方法論

3.1 文献探索のリソース

- 何を使って何を探すか。

《表 1》文献探しに関わる資料と媒体（茂木 2013b）

	紙媒体	電子媒体
一次資料	[A] 図書, 論文, 報告書など	[C] 論文(電子化), 電子書籍など
二次資料	[B] 年鑑, 文献目録など	[D] OPAC, 論文データベースなど

- ※「一次資料」… 探す対象の図書や論文そのもの（ゴール）
「二次資料」… 一次資料を探すための道具となる資料

- ゴールは[A]? それとも[C]?

- ・ 伝統的には, [A] (紙の「現物」を入手する)。近年では, [C] (ネット上で論文の本文を入手する) も増えている。
 - 「とりあえず[C]で済ませる」という感覚 (若い世代) と, 「[C]があればラッキー (なければ次は当然[A])」という感覚 (上の世代) のズレ。
 - [C]の大きなメリットは入手までの時間的・金銭的成本が低いこと。ただし, すべての[A]が[C]になっているわけではないことは注意すべき。

- 道具は[B]? それとも[D]?

- ・ 伝統的には, [B] (『国語年鑑』『日本語教育年鑑』や各種の文献目録) を使って探していた (し, 今でもそのように指導されることがある)。近年では, 最初から[D] (論文データベース類) を使うのが普通。
 - これもコストからすると必然の流れ。ただし, それで「なくなったもの」を心配する声もある。
 - 例: 年鑑では1年分の文献を見渡して, タイトルからは関連性が分からないものも見つけられた。データベースだとそれができない。(cf. 大木 2014)
 - 現実には, データベースですべての文献を見つけることはできないし, 年鑑の代わりに (ある程度) 果たすデータベースもある (→p.9)。

- 今ではリアルな (アナログの) 世界ではなく, デジタルの世界が文献探索の最前線になっている。

- 一方で, 「デジタルがすべて」ではなく, 目的 (例: 「ちょっと探す」「とことん探す」) に合わせて, どういう方法がありうるのかを理解しておく必要がある。

3.2 紙媒体の二次資料 ([B]) を使う。

1) 年鑑：

前年に発行された文献のリストを、分野・トピック別にまとめたもの。一覧性に優れる。

例) 『国語年鑑』(国語研), 『日本語教育年鑑』(同), 『国文学年鑑』(国文研)

※ 近年では冊子体の発行は廃止→データベースに移行。

- ・日本語学分野では、紀要類の論文を集めて冊子にした『日本語学論説資料(旧・国語学論説資料)』(論説資料保存会, 1966～)も発行されている(2000年からはCD-ROMでも)。

2) 文献目録：

特定のトピックに関する文献を集めたリスト。網羅性に優れる。

例) 『日本語研究資料集』シリーズ(ひつじ書房, 1992～1997(3冊刊行。未完))

日本方言研究会『20世紀方言研究の軌跡』(国書刊行会, 2005)

馬場俊臣『現代日本語接続詞研究：文献目録・概要及び研究概観』(おうふう, 2010)

佐藤喜代治『語彙研究文献語別目録(講座日本語の語彙 別巻)』(明治書院, 1983)

李漢燮『近代漢語研究文献目録』(東京堂出版, 2010)

※ 近年ではウェブ上に(移行)公開されているものもある。「目録リンク」[WEB](#)参照。

3) レビュー論文・総説：

あるトピックに関して、それまでの研究の流れや今後の展望をまとめたもの。

例) 第二言語習得研究会『第二言語としての日本語の習得』(凡人社, 1998～)

日本語文化学会『第二言語習得・教育の研究最前線』(同, 2003～08年版) [WEB](#)

- ・日本語日本文学分野では、直近数ヶ月～1年の研究動向(その間に発表された論文)を紹介する雑誌記事が定期的に出されている。

例) 特集「日本語学界の展望」『日本語の研究』(日本語学会)

特集「国語国文学界の動向」『文学・語学』(全国大学国語国文学会)

「学界時評/国語」『アナホリッシュ国文学』(響文社)

「学界時評/日本語の歴史的研究」『レポート笠間』(笠間書院) [WEB](#)

4) 事典類 (→p.4)・講座もの

専門用語やテーマ・トピックの解説に、基本文献のリストが添えられている。

■紙媒体の二次資料には、それぞれ適した使い方がある。

1)は、テーマが決まっていない段階での入り口としても使われていた。

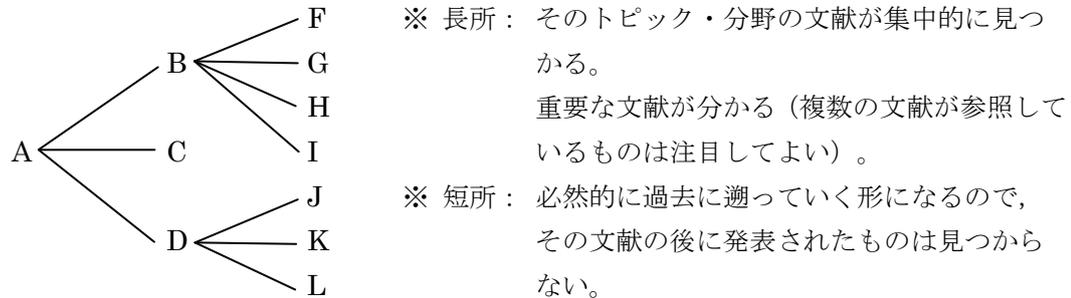
2)は、「とことん探す」ためのツール。〈評価読み〉の材料を揃えるのに使える。

3)は、他者による評価付き→〈評価読み〉の参考になる。

4)は、テーマがおおまかに決まった後の〈調べ読み〉に適している。

3.3 紙媒体の一次資料 ([A]) を使う

ある文献の「参考文献」欄を見て、新たな文献の情報を得る。いわゆる「芋づる式」。



- 「芋づる式」探索は、新しい文献からスタートするのがよい。（商業誌や学会誌の「特集号」の各記事の参考文献欄を使うと効率がよいことも。）

3.4 電子媒体の二次資料 ([D]) を使う

- いきなり Google などの検索エンジンを使うと、検索結果のノイズが多くなりすぎる。最初は「学術情報」もしくは「出版物」に限定した情報で検索すると効率がよい。

- 「網羅的」データベースか「専門特化型」データベースか（中野・渡辺 2013）。

1) 網羅的（一般）データベース ^{WEB}

収録情報に分野の限定がない（場合によっては、その出版物が学術情報であるかどうかの限定もない）タイプのデータベース。

- ・ 国立情報学研究所：CiNii Books

全国の大学・機関の図書館の蔵書目録を横断検索できるサービス。地域や都道府県別にそれぞれの図書館の所蔵館が分かる。

- 「蔵書目録 (OPAC)」は、基本的に「図書」「雑誌」単位の情報を調べるもの。図書の場合は書名や著者・編者名、雑誌の場合は誌名や発行元で検索する。

→ 図書（論文集）や雑誌に収録されている「論文」のタイトルや著者名では、原則検索できないということに注意。

→ ① CiNii Books では目次情報が登録されている場合、ヒットする。

② ウェブ書店（後述）は、図書の目次データベースとして利用できる。

③ 「日本語研究・日本語教育文献データベース」（後述）等は論文集データも収録。

- 国立国会図書館：NDL-OPAC
 検索機能（ゲストログイン）は登録なしで利用可。図書のほか、「雑誌記事索引」の検索ができる。博士論文に限定した検索も可能。

- 国立情報学研究所：CiNii Articles
 基本的に無料（一部有料の機能もあるが、契約している大学内からは無料で利用可）。一部の全文ファイルを持つほか、機関リポジトリ（後述）へのリンクも豊富。NDLの「雑誌記事索引」のデータも含んでいる（最新情報の反映にはタイムラグがある様子）。
 （「芋づる式」の弱点だった被引用関係も分かるが、人文系の国内雑誌ではかなり限定的。）

- 商用データベース
 有料の文献検索サービス（NDL「雑誌記事索引」＋独自データが検索対象）。大学が契約している場合は、図書館ウェブページ経由で、無料で利用可能。
 例） 「magazineplus」（日外アソシエーツ）
 「雑誌記事索引集成データベース（ざっさくプラス）」（皓星社）

- Google Scholar
 ウェブ上の論文（個人ページで公開されているものも含む）を収集したデータベース。被引用関係の利用はCiNii Articlesより良好（特に、国際的な英文雑誌など）。

- ウェブ書店
 図書の目次情報や全文を検索対象にしているウェブ書店は、「図書の中身」データベースとして利用価値が高い。
 例） 「honto」（2Dfacto, Inc.）… 目次情報が早期に登録される。
 「Amazon.co.jp」… 一部図書は本文まで検索対象に含まれる。洋書は「なか見！検索」機能で「立ち読み」できることも珍しくない。

- 横断検索
 複数のデータベースを同時検索できるサービス。データが大きいため、他分野の雑誌から意外な文献が見つかることもある。（理論系（特に言語習得分野）や工学系の人には有益？）
 例） 論文検索 Qross（アトラス）… CiNii Articles などの他に自然科学分野の Science Direct や PubMed が横断検索できる。
 J-GLOBAL（科学技術振興機構）… 科学技術系のデータベースが中心。

2) 専門特化型（分野限定）データベース ^{WEB}

収録情報が特定の分野に限定されたデータベース。研究機関によるものが代表的。

- ・国立国語研究所：「日本語研究・日本語教育文献データベース」

旧『国語年鑑』『日本語教育年鑑』を基盤とする。雑誌論文約 18 万件＋論文集などの単行本の掲載論文約 1 万件。論文の目次，キーワード，分野などの情報がヒットするのが強み。近年，年 3 回更新体制＋本文へのリンク付与（高田ほか 2014）。

- 『国語年鑑』のような一覧性を持った二次資料が失われてしまった……（p.5）と嘆く方は，分野指定の詳細検索を。「2013 年」の「文法」分野の論文」などの検索が可。

分野 	<input type="checkbox"/> 日本語学一般 <input type="checkbox"/> 日本語史 <input type="checkbox"/> 音声・音韻 <input type="checkbox"/> 文字・表記 <input type="checkbox"/> 語彙・用語 <input type="checkbox"/> 文法 <input type="checkbox"/> (待遇表現) <input type="checkbox"/> 文章・文体 <input type="checkbox"/> (古典の注釈) <input type="checkbox"/> 方言・民俗 <input type="checkbox"/> 日本語情報処理 <input type="checkbox"/> コミュニケーション <input type="checkbox"/> マスコミュニケーション <input type="checkbox"/> 国語問題・言語問題 <input type="checkbox"/> 国語教育 <input type="checkbox"/> 日本語教育 <input type="checkbox"/> 言語学 <input type="checkbox"/> 資料 <input type="checkbox"/> 書評・紹介 <input type="checkbox"/> (索引) <input type="checkbox"/> (辞典・用語集)
--	--

《図 3》「日本語研究・日本語教育文献データベース」の詳細検索

- ・国文学研究資料館：「国文学論文目録」

旧『国文学年鑑』を基盤とする。雑誌＋図書論文約 53 万件。本文へのリンクはない。

- ・国立教育政策研究所教育図書館：「教育研究論文索引検索」

国語教育・日本語教育を含む雑誌論文約 23 万件。部分的に CiNii Articles へのリンクあり。

- 専門特化型は，分野限定のため検索結果にノイズが少ないこと，内部的に付与されているキーワードにもヒットすることなど，データに加わっている「一手間」が強み。

3) 留意点

- 「論文データベースでヒットしないから，このトピックの先行研究はない」は誤り。特に CiNii Articles だけ，という利用法は危険（そもそもデータに偏り）。

◆検索時の注意点：

- ・ヒット件数が多すぎる！ → 専門特化型データベースを先に使う。
 - 例 1：タイトル「格」で検索 … CiNii Articles：161,755 件，国研：2,151 件
 - 例 2：フリーワード「そうだ」で検索 … CiNii Articles：1,351 件，国研：60 件
- ・ヒットしない／件数が少ない！ → キーワードを連想する（別名，上位概念など）。
 - 例：「経験」の「テイル」 →
- ・漢字・キーワードの表記（CiNii Articles 論文検索／著者検索の場合）
 - 例 1： 「万葉集」(5,061 件) / 「萬葉集」(5,061 件) → 包摂 (cf. 長坂 2014)
 - 「てにをは」(57 件) / 「テニヲハ」(60 件)
 - 「係り結び」(119 件) / 「係結び」(25 件) / 「係結」(84 件)
 - 例 2： 「矢沢」(2,334 件) / 「矢澤」(2,334 件) → 包摂
 - 「岡崎」(10,815 件) / 「岡崎」(262 件)

4. 書誌情報

- データベースの検索結果や、図書・論文の「参考文献」欄から何を読み取るか。

1) 図書の書誌情報

例) 龍南健児 (1960)『熊本のことば』立田書房.

龍神橋わたる(編)『九州方言のアスペクト』渡鹿出版, 2003 年.

- この例では、「著者・編者名」「発行年」「書名」「発行元」を記載(実際の順序はさまざま)。場合によっては、「版」(「第2版」「増補改訂版」など)や「出版社の所在地」が含まれることもある。

2) 論文の書誌情報

例 1) 龍神橋わたる (2001)「熊本方言の「〜つたい」について」『白川ジャーナル』36, pp.68-79, 熊本ことばの会.

- この例では、「著者名」「発行年」「論文タイトル」「雑誌名」「巻号」「掲載ページ」「発行元」を記載。
- ※ 「発行年」は「年」と「年度」を混同しないよう奥付を確認。「巻号」の情報は、通常「1巻2号」「1-2」「1(2)」のように表記し、月刊誌でも「2月号」のように書かない。データベースではこれらの項目で混乱が見られる場合がある(次ページ [Q2](#)参照)。

例 2) 黒髪ポプラ (2003)「熊本方言のヨルとトル」, 龍神橋わたる(編)『九州方言のアスペクト』, pp.3-22, 渡鹿出版.

- この例(図書収録の論文)では、「著者名」「発行年」「論文タイトル」「書籍名」「書籍の編者名」「掲載ページ」「発行元」を記載。
- ※ このように表記した場合は、図書全体ではなく、その中の一本の論文(記事)を表すことに注意。

■実際に文献を入手するときのために、できるだけ多くの項目を漏らさずメモしておくのが望ましい。特に書名、雑誌名は類似のものが多い(紀要は改組などで名前がコロコロ変わることがある)。

■これらの情報が正確に読み取れない人は、自分の論文の参考文献欄もうまく書けない。「データベースからコピペ」ではなく、各項目の意味を確認しながら再配列するとよい。(読み手がその文献に到達できるだけの正確さがなければ、情報の意味がない。)

【付録 1】 CiNii Articles の検索結果に関して質問されること

Q1 タイトルにキーワードが含まれない論文がヒットしたのですが？

→ 抄録（要旨）やキーワードも検索対象になっているためです。タイトルのみを検索したい場合は「詳細検索」機能を使います。全文があるものは「全文検索」もできます。

Q2 検索結果に同じ論文が複数出てくるのですが？

The screenshot shows three search results for the article 'ムシロの「予想意外性」について' by 申在景. Each result is numbered 1, 2, and 3. Result 1 includes a snippet: '... このムシロについて、従来の研究や辞典では、「ムシロの意味は比較・選択・評価・判断の4つである」と説明されているが、これを越える説明おまんどないも ...' and a '関連リポジトリ' button. Results 2 and 3 do not have snippets or buttons.

→ このようなデータの重複は、複数のデータベースを機械的に統合していることに原因があるようです。上の例では、論文「1」では巻号が「(12)」(=12号)、「2」では「12」(=12巻)になっており、「3」では発行年が「2013」(=年度)表示になっているため、機械的に同じ論文だと判定できなかったのだと思われます。

→ なお、古い論文の中には発行年が「????」になっているものもあります。参考文献に挙げる場合には、複数のデータベースか現物で正確な情報を調べる必要があります。

Q3 私の論文のタイトルに誤字脱字があるのですが？

→ 私が見た中で最も面白かったのは、「派生プロセス」(←プロセス)、「苦手研究者」(←若手)です。右下の「問題の指摘」から申請すれば、直してもらえます。

Q4 同じ号にどのような論文が載っているか見たいのですが？

→ 「収録刊行物」欄に「この号の目次」というリンクがある場合は、目次にジャンプできます。ただし、目次がところどころ抜けている(=部分的に検索できない論文がある)雑誌もあるようです。(おそらく紀要の電子化事業の際に、許諾が取れなかったもの。)

Q5 紀要の発行元は研究室のはずなのに、「〇〇大学」としか書いていないのですが？

→ 発行元の情報が正確に知りたい場合は、「この論文をさがす」欄から CiNii Books にジャンプします。「書誌事項」欄に雑誌の発行元情報があります。(ただし、発行元の名称が変わっている場合、当該の号の情報は他のデータベースや現物で確認しないと正確には分からないこともあります。)

5. 所在と入手方法の確認

5.1 所在の確認

- 読みたい文献は決まった。さて、どこで手にとって見られるか。
- ・ まず、所属大学内にあるか調べてみる。図書館の OPAC（蔵書目録）で検索。大学によっては、図書館で資料を集中管理していない（学部の資料室などに分散している）場合もあるので、利用の可否やコンタクト方法を確認する。
- ・ 大学になれば、公立図書館（市立・都道府県立）の OPAC でも同様に検索してみる。（あるいは、「カーリル」[WEB](#)で横断検索を行う。）
- ◆ 方言関係の資料は、大学図書館より公立図書館の方が充実していることも。
- ・ 買ってもよいと思う図書は、ウェブ書店で検索してみる。絶版かどうかは、ウェブ書店の在庫状況ではなく、出版社のウェブページで確認する。
- ・ 古書の利用も検討（明らかにおかしな価格の場合もあるので、要比較）。

5.2 入手方法の確認

- ・ 近くで手に入らない場合は、大学図書館を通じて「文献複写サービス」（欲しい論文の部分だけコピーして送ってもらう）か「相互貸借サービス」（欲しい本そのものを郵送で貸してもらう）を利用する。いずれも有料（実費）で、ある程度の時間がかかる。
- ◆ 海外文献の取り寄せはコスト大。国立国会図書館の遠隔複写サービスを大学図書館経由で利用できることもあるので、まずはレファレンス担当者に相談するとよい。
例）中国・韓国の論文データベース（CAJ・KISS）からの複写 [WEB](#)
- ・ CiNii Books で近隣の大学の図書館にあることが分かったら、それを利用する。
（学外者にどの程度のサービスを提供しているかはまちまち。図書館ウェブページで確認するとよい。場合によっては、所属大学の図書館に仲介してもらう。）
- ・ 専門分野の近い教員が個人的に持っていることもあるので、聞いてみる。
- ・ 報告書関係は、プロジェクトの関係者などに紹介してもらうか、ホームページ等から連絡先を探して直接問い合わせしてみる。
- ◆ 案外これで解決することも多い。現物や論文の抜き刷りをもらえたことも。

※ 「(他人の著作を) コピーしてください」 は法的にアウトなのでお願いしないこと。

5.3 機関リポジトリについて

「機関リポジトリ(repository)」とは、各大学がウェブ上で研究成果等を公開するための「貯蔵庫」のようなシステム。

例) 大阪大学学術情報庫 OUKA (<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/>)

広島県大学共同リポジトリ HARP (<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/>)

- 日本の大学の場合、リポジトリのコンテンツの大半は紀要論文 (佐藤 2014)。学内刊行物が優先的に収録される傾向。
- 主要なデータベース (CiNii Articles, 日本語研究・日本語教育文献データベース) には、機関リポジトリへのリンクがある。「データベースを検索して、検索結果のリンクから本文ファイルを機関リポジトリで入手」(データベースは書誌情報だけで、リポジトリに本文が置いてある) という傾向が強くなってきている。

■日本の人文系の論文の主要発表媒体は紀要であるため、日本語研究者への機関リポジトリの恩恵は大きい。

※査読制度が整っている学会誌論文と異なり、紀要論文には質的な問題があることが指摘されてきた (例: 谷沢 1980) が、それでも生産量は圧倒的。

例) ・『国語年鑑 (2008年版)』収録雑誌のうち、約8割が紀要 (茂木 2010)

・2003~12年のとりたて関連論文 (500編) の約6割が紀要論文 (茂木 2013a)

- ちなみに、機関リポジトリで公開されている日本語関連の学会誌論文は少数 (研究者個人が積極的に利用しているケース)。しかも、誌面そのままの形 (「出版社版」) ではなく、著者の手元にある最終原稿 (「著者版」) が公開されていることもあり、利用者側の知識が必要 (レイアウトがズレているなど、引用時に注意を要する。参考文献欄に著者版の入手先まで記載するなどの工夫が要る)。この理由は→6.3節

※かと言って、学会誌がウェブ上の他の場所で入手できるかということ、そうでもない。日本の人文系学会誌はデジタル世界では見つからない「秘境」(佐藤 2014)。

- 国内開催の国際学会のプロシーディングは、リポジトリで入手できることもある。

※理論系の論文などが多く掲載されている英文誌 (原則有料) は、そもそも別ルートで探す必要。大学図書館のウェブページから電子ジャーナルを利用できることがあるため、そこから。包括契約されている場合、多数のタイトルを利用できる (が、予算の都合で大学によっては事情が変わりつつある)。

■人文科学分野では、電子化された論文のありかには特徴があることを理解する。

●座ったままで論文をできるだけ多く入手するためにはどうしたらよいか？

- 前提**
- ・ CiNii Articles には機関リポジトリや学会誌論文公開サービス（例：J-STAGE）の論文本文へのリンクがある。ただし、それは網羅的ではなく、最新情報であるとも限らない。
 - ウェブ上に「ある」のに、CiNii Articles からはたどり着けない。
 - ・ 機関リポジトリの中には、Google の検索対象に入っていないものもある。CiNii Articles の書誌情報もヒットするが、すべてが表示されるわけではない。
 - ウェブ上に「ある」のに、検索エンジンからはたどり着けない。

■下の表のように短期間で状況はよくなっているが、まだ工夫が必要。

《表 2》学会誌の本文公開状況（左：2012 年 1 月（茂木 2012），右：2014 年 11 月）

学会誌タイトル	公開元	巻号	CiNiiからのアクセス	公開元	巻号	CiNiiからのアクセス
『国語学』 （国語学会） （※現・日本語学会）	国立国語研究所	1(1948)– 219(2004)	×	国立国語研究所	1(1948)– 219(2004)	×
	CiNii	201(2000)– 219(2004)	○	CiNii	201(2000)– 219(2004)	○
『日本語の研究』 （日本語学会）	CiNii(有料)	220(2005)– 245(2011)	○	CiNii	220(2005)– 256(2014)	○
『計量国語学』 （計量国語学会）	(未公開)			計量国語学会	29(1)(2013)	×
『日本語文法』 （日本語文法学会）	(未公開)			(未公開)		
『言語研究』 （日本言語学会）	Journal@rchive	1(1939)– 128(2005)	×	J-STAGE	1(1939)– 128(2005)	○
	日本言語学会	129(2006)– 138(2010)	×	日本言語学会	129(2006)– 143(2013)	×
『English Linguistics』 （日本英語学会）	Journal@rchive	1(1984)– 24(2007)	×	J-STAGE	1(1984)– 28(2011)	○

■日本語文法研究者にオススメのコース：

- ① CiNii Articles もしくは専門特化型データベースで検索。論文タイトル・著者名・発行元情報を入力。
- ② CiNii Articles で本文リンクを確認。あればそこから本文を入力。
- ③ Google で検索し、本文ファイルがないか確認。あれば本文を入力。
- ④ 紀要であれば、発行元の大学の機関リポジトリで検索。
- ⑤ 学会誌であれば、学会ウェブページで本文公開の有無を確認する。

→ 「検索の手間」はかかるが、「論文を読むまでの手間」は従来に比べて少ない。

※上の方法で見つけた本文のファイルには、書誌情報が付いていないことがある。後で「これ何だっけ？」になるので、論文の本文と書誌情報を合わせた保存を推奨。

【付録 2】常に最新の文献情報に触れる方法

○ アナログで攻める

- ・ 月刊誌・学会誌を購読する。もしくは、毎月、図書館で読む。
- ・ 研究科や研究室宛に送られてくる雑誌・紀要を片っ端からチェックする。(いっそのこと、受入係になってしまう。)
- ・ 大学図書館の紀要コーナーを定期的に巡回する。(いっそのこと、図書館でアルバイトをしてしまう。)
- ・ 学会にできるだけ参戦し、会場の書籍コーナーでじっくり見せてもらう。毎年発行される目録を送ってもらえないかお願いしてみる。
- ・ 「あれ読んだ？」という話が気軽にできる知り合いを増やす。

○ デジタルで受ける

図書

- ・ オンライン書店で、新刊案内のメール配信サービス(分野やキーワードを指定できるもの)に登録する。
- ・ 「ブックメール倶楽部」[WEB](#)のような新刊情報サイトのメール配信に登録する。
- ・ 専門分野の図書を多く刊行している出版社のメール配信に登録する。

雑誌

- ・ Google Scholar の「アラート」機能を利用する。登録したキーワードを含む文献のリストがメール配信される(論文以外の文献情報も含まれるので、精度はそれほど高くない)。
- ・ CiNii Articles の RSS 配信機能 [WEB](#) を利用する。特定のキーワードで検索した結果を登録すると、最新の検索結果が配信されるようになる(CiNii のヘルプには、Internet Explorer で読む方法が書かれている)。
- ・ 国立国会図書館の「雑誌記事索引 RSS」[WEB](#) で、希望の学会誌や紀要の RSS 配信を受ける。※これは重度のマニア向け。

6. 論文を公開する

- 論文を「読まれる」状態にするにはどうしたらいい？

6.1 アナログで攻める

印刷物（図書・雑誌）流通のウエイト大，という習慣は変わらず。（ex. 紀要の交換）

参考 （略）少し驚いたのだけど、今の院生さんには論文を書いても抜き刷りを何処にも送らない、という人もいるんだね。まあ、「論文は PDF で読むもの」と思っている人も多いからわからなくはないんだけど、やっぱり「目の前に送られてくると読む」というのはある訳で馬鹿にならないと思うんだけど。（@kankimura 2014年6月29日 [WEB](#)）

- 論文の抜き刷り（別刷）を，引用した論文の著者や同分野の研究者に送（りつけ）るという手段は今でも有効。

6.2 デジタルで攻める

- ・ 「ビジビリティ」（visibility, 可視性）, 「ファインダビリティ」（findability, 見つけやすさ）の壁
→ (いいかどうかは別にして)検索エンジンやデータベースで検索してヒットしない「見えない」論文は読まれない。いかにウェブ上で「見える」ようにするか。

方法① 個人ウェブページで公開

- 1) 出版前： 日本語学分野では，草稿（manuscript, ms.）を引用したり公開したりする習慣があまりない。（理論系の研究者は活用していることも。）
- 2) 出版後： 公開してみると意外に読まれるかも。（← Google から「見ている」人）
例) [a] ウェブ公開した報告書論文：
茂木俊伸（2001）「とりたて詞「しか」における「予想」について」
→ 被引用：8（国内・書籍 1, 雑誌 1, 報告書 2/海外・雑誌 2, 博論 2）
[b] ウェブ公開していない学会誌論文：
茂木俊伸（2002）「「ばかり」文の解釈をめぐる」『日本語文法』2(1)
→ 被引用：7（国内・書籍 1, 雑誌 5/海外・雑誌 1）

方法② データベースを活用する

- ・ 機関リポジトリ等における電子化を「拒まない」だけでも効果あり。
→ 2013年度以降の博士論文は，機関リポジトリで公開される原則にルール改定。

- ・ キーワードや要旨が付けられる場合は、データベースでヒットする（＝扱っている内容や分野を大きく or 具体的に表して、自分ならこれで検索する）ような文言を入れる。
→ タイトルから内容が分かりにくい場合は、特に注意する。

■この点は 5 節までの「探索」の話の裏返し。探索時に「これは探しにくい／見逃すだろう」と感じたポイントを、「自分の論文を探しやすくする」ことに活かすべき。

6.3 留意点：著作権の問題

- ・ 特に学会誌の場合、投稿規定をよく読んで、著作者の権利を確認しておく必要（学会誌によってずいぶん異なる）。

例：『日本語文法』は、論文の著作権を学会に譲渡する方式を採用。

- ・ 自分では誌面（出版社版）の公開ができない。
- ・ 最終原稿（著者版）を使う場合も、2年は公開禁止。
- ・ 別の著作に再録したい場合は許諾を取る必要。

※ 現行の規定では、『日本語文法』の論文をそのまま自分の博士論文に再録した場合、2年間は機関リポジトリでの博士論文の公開ができないことになる？（ルール間の衝突）

- ・ 紀要の場合も、投稿要領をよく読む。自分たちの雑誌ならルールを決める。
→ 附属図書館と連携して、発行されたら自動的に機関リポジトリで電子版が公開される、というルールにする例が増えてきた。

※ この話は、「論文の公開を管理する立場」（例：学会役員、研究室の雑誌担当）の人は特に真剣に考える必要がある（cf. 漢字文献情報処理研究会 2014）。

- ・ どのような形で電子化する？（印刷所からデータもらう？ 紙をスキャン？）
- ・ バックナンバーはどうする？（手続き方法は？ 許可をもらう権利の範囲は？）
- ・ ルールの整備は？（投稿規定を定める？ ない場合はどうする？）
- ・ 公開先は？（機関リポジトリ？ 独自ウェブページ？）
- ・ 著作権は譲渡方式？ ライセンス方式？（cf. 時実 2006）
譲渡のメリット： 二次利用が可能。
譲渡のデメリット： 再録の許可、紛争処理などの事務対応が発生。
- ・ 紙媒体はやめる？ 電子版と並行して発行？（ISSNはどうする？）

■誰も損をしないように、時代に合わせた議論が必要になっている。そのために、まず書き手が「書くこと」と同じくらい「読んでもらうこと」に関心を持つ必要がある。

【言及ウェブページ】

- p.1 : 「やちまた」〈<http://www.d1.dion.ne.jp/~tmogi/yachimata/>〉
「とりたて」関連研究文献目録
〈http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/literature/asia/nihonbungaku/tmogi/fp_biblio/〉
外来語の意味・用法に関する文献目録
〈http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/literature/asia/nihonbungaku/tmogi/lw_biblio/〉
- p.2 : Google Scholar 〈<http://scholar.google.co.jp/>〉
- p.6 : 目録リンク 〈<http://www.d1.dion.ne.jp/~tmogi/yachimata/mokuroku.html>〉
『第二言語習得・教育の研究最前線』（お茶の水女子大学附属図書館）
〈<http://www.lib.ocha.ac.jp/oab/99dainigengo/listOfIssue.html>〉
笠間書院 kasamashoin ONLINE : 学界時評 〈<http://kasamashoin.jp/jihyo.html>〉
- p.7 : CiNii Books 〈<http://ci.nii.ac.jp/books/>〉
- p.8 : NDL-OPAC 〈<https://ndlopac.ndl.go.jp/>〉
CiNii Articles 〈<http://ci.nii.ac.jp/>〉
Magazineplus 〈<http://www.nichigai.co.jp/database/>〉
雑誌記事索引集成データベース（ざっさくプラス）〈<http://info.zassaku-plus.com/>〉
honto 〈<http://honto.jp/>〉
Amazon.co.jp 〈<http://www.amazon.co.jp/>〉
論文検索 Qross 〈<https://qross.atlas.jp/>〉
J-GLOBAL 〈<http://jglobal.jst.go.jp/>〉
- p.9 : 日本語研究・日本語教育文献データベース 〈<http://www.ninjal.ac.jp/database/bunken/>〉
国文学論文目録データベース 〈<http://base1.nijl.ac.jp/~rombun/>〉
教育研究論文索引検索 〈<http://www.nier.go.jp/library/>〉
- p.12 : カーリル 〈<https://calil.jp/>〉
複写サービス：アジア情報室資料の遠隔複写サービス（国立国会図書館）
〈<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/asia-ds.php>〉
- p.15 : ブックメール倶楽部 〈<http://bookmailclub.com/>〉
CiNii ヘルプ [CiNii 全般 - メタデータ・API - B. RSS, Atom フィードを利用する]
〈http://support.nii.ac.jp/ja/cinii/api/api_outline#OpenSearch_B〉
雑誌記事索引の RSS 配信について（国立国会図書館）
〈http://www.ndl.go.jp/jp/data/sakuin/about_rss.html〉
- p.16 : Kan Kimura (on DL) @kankimura（木村幹氏）
〈<https://twitter.com/kankimura/status/483164755939438595>〉

【参考文献】（※発行年の後に「*」を付した文献は、ウェブ上で本文が入手できます。）

- 大木一夫(2014)「(2012年・2013年における日本語学界の展望) 研究史」『日本語の研究』10(3), pp.5-8, 日本語学会.
- 大向一輝(2013)「CiNii Articles と変わりゆく学術情報流通」『専門図書館』262, pp.8-12, 専門図書館協議会.
- 岡野裕行(2014)「近代文学研究における論文データベースの現在」『昭和文学研究』68, pp.104-106, 昭和文学会.
- 漢字文献情報処理研究会(2014)『人文学と著作権問題：研究・教育のためのコンプライアンス』好文出版.
- 佐藤 翔(2014)「ビジビリティの王国：人文社会系学術雑誌という秘境」『DHjp No.4 オープンアクセスの時代』, pp.18-24, 勉誠出版.
- 高田智和・早田美智子・老子裕輝・籠宮隆之(2014)「日本語研究・日本語教育文献データベースと外部機関レポジトリとの連携」『日本語学会 2014 年度秋季大会予稿集』, pp.237-240, 日本語学会.
- 谷沢永一(1980)「アホばか間抜け 大学紀要」『諸君!』12(6), pp.160-173, 文藝春秋.
- 時実象一(2006*)「学術論文の著作権：情報科学技術協会著作権問題委員会における議論」『情報の科学と技術』56(6), pp.282-287, 情報科学技術協会.
- 長坂和茂(2014)「書誌データベースの異体字処理：谷と穀は同じ字か」『大学図書館問題研究会誌』38, pp.15-23, 大学図書館問題研究会.
- 中野真樹・渡辺由貴(2013*)「国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」の有用性」『国立国語研究所論集』5, pp.65-76, 国立国語研究所.
- 茂木俊伸(2010*)「日本語研究論文情報の電子化の実態と論文探索スキル」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』7, pp.9-14, 鳴門教育大学.
- 茂木俊伸(2012*)「電子化された日本語研究論文の流通実態と問題点」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』9, pp.23-29, 鳴門教育大学.
- 茂木俊伸(2013a*)「電子化された日本語研究論文の流通実態と「つなぐ」文献目録によるアクセス支援」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』10, pp.29-35, 鳴門教育大学.
- 茂木俊伸(2013b)「ウェブを活用した日本語研究文献情報の収集」『日本語学』32(14)(2013年11月臨時増刊号), pp.18-30, 明治書院.

付記：

本チュートリアルの内容は、日本学術振興会科研費若手研究(B)「日本語教育用辞書作成に向けた「外来語の文法」の記述的研究」(研究課題番号：25870484)による研究成果を含んでいます。